

川特だより

<学校教育目標>

『ひとりだちする生徒

～社会的に自立できる心豊かな人間を育成する～』

<めざす学校像>

『生徒一人一人の自立を育てる 笑顔あふれる学校』

いじめをテーマに1年生の道徳の授業を行いました。

既にご存知の方が多いと思いますが、これまで「教科外の活動」とされてきた「道徳」が、昨年度より小学校において、今年度は、中学校において「特別の教科道徳」となりました。きっかけは、2011年大津で起きた、中学生がいじめにより自殺した問題を受け、政府の教育再生実行会議で提言されたことによります。年間授業時数は変わりませんが、副読本が検定を受けた教科用図書となり、内容も主人公の感情にせまり、感想を述べ合ったりする「読み物道徳」から「考え、議論する道徳」へと転換が図られました。特別支援学校も基本的には同じです。高等部のキャリア段階では、モラルスキルやソーシャルスキルを中心に、青年期の特性を考慮し、健全な社会生活を営む上で必要な道徳性を一層高めることに努めなければなりません。本校では、教育課程上は「特別の教科道徳」として独立させた位置づけはしませんが、各教科、総合的な学習の時間、特別活動及び自立活動と関連を密にし、全教育活動を通して取り組み、経験活動の拡充を図ることで、道徳的心情を育て、豊かな人間性を備えた人財の育成を図ります。生徒にとって最後の学校になる本校では、ひとりだちに向け、将来の生活を見据え、広い視野に立って道徳的判断や行動ができるように指導しています。相手と自分、集団と自分との関係性や立場の違いを学ぶことは、社会性の基盤づくりそのものです。また、モラルスキルとソーシャルスキルの育成は、道徳性や道徳的判断力の基盤となります。

先日、1年生の最初の道徳の授業を受け持たせていただきました。テーマは、いじめであり、単元名は『最後の言葉』、副題は「後悔しない」としました。大津事件より前の1994年に愛知県西尾市の中学校で実際に起きた、中学2年生の男子生徒がいじめを苦に自殺した事件を題材にしました。本人の手記である『最後の言葉』と実際のアンケート結果から、いじめをする人、いじめられる人、周囲で見ている人のそれぞれの立場や心情、残された家族や身内、クラスメイト、友人の後悔、そして何よりも、死より他に解決する方法を見いだせないほど追いつめられてしまった男子中学生の心情にも全員でせまりました。悪いとわかっているにもかかわらずいいじめについて、どんどんエスカレートしてしまういじめについて、どうすればよかったのか等をそれぞれ深く考えてもらいました。最後は、「助けを求める」「助ける」「笑顔」「親友」「逃げる」をキーワードに命を守るためにとるべき行動についても考え合いました。火事や災害時、命を守るために避難する(逃げる)のは当たり前行動であり、「その状況から逃げる事」や「周囲に助けを求める行動」は、勇気ある大切な行動であることも確認合いました。最後に<脳の話>を加え、一連の学びを深め・自身のとるべき行動に結びつけました。機会があれば、2,3年生においても道徳の授業実践をしたいと考えます。

評議員会で、連絡帳の在り方について議論しました。

先日、第1回評議員会が開催されました。評議員会は、保護者や地域住民などの相互の意思疎通や協力関係を高めるために設けられたもので、地域の自治会から推薦いただいた方、川越市障害者相談支援センター相談支援員、本校元職員、本校保護者の代表であるPTA会長、副会長、本校管理職、教務主任、進路指導主事により構成され、毎年3回開催されています。本校にとっては、生徒のよりよい成長と学校教育目標の具現化について、校長の求めに応じ御意見を述べていただく貴重な機会になっています。今回は、今年度の学校教育目標、経営方針、入学選考、卒業生の進路状況等について説明・報告させていただいた後、新学習指導要領と教

育課程、進路指導、キャリア教育の在り方等広く意見交換が行われました。その中で、本校生徒に共通する課題である、コミュニケーション能力の育成について議論いただきました。本校生徒の特性として、自己調整力や自己修正力、汎化力（ある経験や成功体験を他の活動や取組に生かす力）に弱さがあり、自分自身に自信が持てず、自己評価が低いことが上げられます。そのため、積極的、主体的に自己発信する機会が少なくなってしまう、十分にコミュニケーション能力が育成されないのではないかという意見が多く聞かれました。解決に向けての方策として、連絡帳の在り方を見直す試みについて、議論と意見交換がなされました。具体的な内容について紹介させていただきます。

- ・連絡帳を通して、生徒の活動や具体的取組の様子等、保護者が知る手立てになっている。
- ・学校での様子を子どもがなかなか話さないので、助かっている。
- ・表記の仕方や読み方で、ニュアンスの違いや行き違いが生じ、誤解が生じることが少なくない。
- ・教員は、互いの行き違いを防ぐために推敲しながら時間をかけて、毎日丁寧に綴っている。
- ・学校からの丁寧な文面に感謝をしているが、それに応えなければという思いが、保護者にとって負担になることがある。
- ・連絡帳を丁寧に書くことに時間とエネルギーを注ぐより、生徒と関わる時間、生徒の実態把握にせまる時間、コミュニケーションをとる時間を大切にする方が有意義ではないか。
- ・必ずしも連絡帳が保護者と担任との信頼構築、共通理解するためのツールではないのではないか。本校生徒は、自分のことは自分で伝えられるはず。
- ・連絡帳が意外にも保護者学校間のトラブルのもとになるケースが少なくない。県立特別支援学校では、必要最低限を綴り、詳細は、電話連絡や面談で伝えている。現に、幼稚園や保育園では事故防止の観点から廃止する動きもある。
- ・保護者としては、毎回丁寧に長文を綴ってくれる担任がいい先生であるとは思っていない。
- ・子どもが、全部連絡帳に書いてあるから学校のことを話さなくても大丈夫と思っているのかもしれないし、親としても学校のことをあえて聞かなくても済んでしまっていることで、コミュニケーション能力育成の機会が少なくなっているのではないか。

連絡帳については、各特別支援学校においても、また、小、中、高等部ではそれぞれ実態差があり、経年物議を醸してきました。特別支援学校長会でも連絡帳を書く時間が、ケガや事故が発生しやすいヒヤリハットの最も多い時間帯であることが確認されていますし、PTA連合会等でも連絡帳の適切な運用について話題になっています。

本校では、こうした御意見や状況を鑑み、生徒のコミュニケーション能力の育成を最優先に考え、積極的に連絡帳の在り方の見直しを図りたいと考えます。具体的な方向性としては、

- ①連絡帳の記述を必要最低限度とし、生徒と保護者間のコミュニケーションの活性化を図る。
- ②保護者、学校相互に、必ず話題にして欲しいこと等を連絡帳に端的に記述する。
- ③重要事項や緊急性がある場合は、電話連絡等で適切に対応する。

ことといたします。後意見等ございましたらお気軽に問い合わせいただければと思います。

保護者、関係者の皆様のご理解ご協力をお願いいたします。

校長 阿部 和彦